

小学校英語教育の推進

1 はじめに

3年以上にわたるコロナとの対峙の日々がようやく終わりを告げようとしている。アフターコロナの幕開けとともに、閉鎖を余儀なくされてきた社会生活の様々なシーンにおいて、積みもった人々の思いが堰を切ったようにあふれ出し、失われた大切なものを取り戻そうと動き出した。多くの制約下で営まれていた学校生活も、平穏であった日常を取り戻すべく様々な取組が再開されつつある。また、この閉ざされた3年間は、これまでの学校生活にはなかった新たな変化をもたらしもした。国の施策として、前倒しで行われたGIGA School 構想実現の取組がその最たるもののひとつである。タブレットを活用したオンライン授業やリモートによる授業は、新たな授業スタイルとして定着した。こうした変化は、今後の学校生活における様々な場面への応用が期待できる。ただ反面、このようにしてもたらされた便利さや快適さの裏に潜む隠れた課題についても目を向けなければならない。それは、不登校児童生徒の増加である。コロナ禍にあった2年間で、小中学校における不登校児童生徒数が約10万人増加したと言われている。直接的な因果関係がどれほどあるのか不確定な部分はあるにせよ、コロナによる影響は大きいと推測できる。学校で直接に対面で授業を受けることの必要性が、こうしたデジタル技術の普及・進歩によりどんどん薄れる可能性もなくはない。状況の変化に合わせ、対応や対策も変化が求められる時代へと移行しつつある。新たな課題を解決するための研究や研修は、その重要性をますます増していくであろう。

さて、令和2年(2020年)4月に小学5、6年生で外国語(英語)が教科化となり4年が経過する。この間、本市の英語教育の推進のために小学校英語教育推進員として、小学校9校を定期的に訪問し、授業参観と指導助言を行った。特に、本市における授業づくりの基本となる「めたふ」の実践と定着に重点をおいた授業づくりを推進してきた。本研究紀要では、4年間の学校訪問で明らかになった成果や課題を総括し、本年度のまとめとする。

2 成果と課題について

学校訪問における授業参観の評価観点は、①楽しい雰囲気(テンポとリズム)の授業づくりができている、②本時のめあて(Today's Goal)がしっかり提示されている、③探究的な学習となるような工夫や活動のつながりがある、④「振り返りシート」を活用した授業の振り返りができている、⑤積極的にClassroom Englishが使われている、⑥ALTとの協働授業ができている、の6点である。この6つの観点について、今後の授業づくりを考える上での課題等を提示し、総括とする。

(1) 楽しい雰囲気の授業づくり

英語を学び始めた入門期の小学3年生や、学び始めて1年余りの小学4年生にとっては、「英語が楽しい」「英語の勉強が好き」と感じさせることが何よりも大切である。児童が楽しいと感じる授業づくりを行う上で、最も重要なことは、授業者が英語を教えることの楽しさを感じながら「楽しく教えること」である。授業者自身が醸し出す個性や滲み出すオーラも重要な要素のひとつであるが、英語の指導においては、何よりもテンポやリズムを大切にしたい。小学3、4年生の英語活動では、各種の体験活動を通して楽しく学ぶことで、英語に「慣れ」「親しませる」ことが大切で、決してその「定着」を図ろうとする必要はない。

- ・授業開始10分間が勝負(つかみの10分)、エネルギーの半分をここに注ぎ込もう
- ・自分のスタイルやいつものルーティンを確立することで授業が“楽(らく)”になる
- ・身近な話題やトピックを盛り込み、英語のコミュニケーションにつなげよう

（２）本時のめあて(Today's Goal)の提示

学習到達目標 (Can-Do リスト) は、児童が、①何ができるようになるのか（「表現」）、②何を学ぶのか（「知識・技能」）、③どのように学ぶのか（アクティブラーニング）、という視点で設けられている。アクティブラーニングは、「主体的・対話的で深い学び」であり、「主体的な学び」は、共同学習の中で一人一人に役割と責任を持たせた活動を取り入れること、「対話的な学び」は、他者や教材、自己との対話を深めることで、自分の存在を豊かにするもの（この意味においては、表面的なコミュニケーションに留まるものではない）、「深い学び」は、単に「読んで訳す」といった活動ではなく、読んで理解し、筆者の問いかけに自分はどうか考えるか、どう判断（賛成・反対）するかということである。「本時のめあて(Today's Goal)」については、各授業において、一定の定着が図られるようになってきた。ただ、一時間（本時）の授業を通して、授業者は児童に「何ができるようにさせるのか」「何を学ばせるのか」「どのように学ばせるのか」を指導プランに具体的に落とし込み、提示していくことが必要である。

- ・「何ができるようになるか」が示されているか
- ・「何を学ぶか」が示されているか
- ・「どのように学ぶか」が示されているか

（３）探究的な学習となるような工夫や活動のつながり

探究的な学習においては、「探究の課程（プロセス）」が重要である。これは、①「課題の設定」：日常生活や教科内容の学習を通して課題を見つける、②「情報の収集」：課題を追究する過程で様々な情報を収集する、③「整理・分析」：情報を整理することで精査したり、考えを交換しながら分析したりして問題解決に取り組む、④「まとめ・表現」：取組の成果をまとめ、他者に向けて表現する、といった４つのプロセスである。あらゆる教科学習の中で、こうした「探究の課程」を大切にしたい授業づくりを実践しなければならない。英語の授業における探究的な学習は、各 Unit で扱われるテーマや題材を授業者がしっかりと吟味し、計画的に取り入れていく必要がある。タブレットなど ICT を効果的に活用するとともに、グループワークやペアワークなどの共同学習を組み入れたりすることも有効である。学習の成果をプレゼンテーションの手法で発表したりすることは、総合的な自己表現活動につながる。

また、英語授業においては、「本時のめあて」を達成するためには、各活動を効果的につなぐことが大切である。「聞くこと」「話すこと」の活動を中心に音声による言語活動を十分に行った上で、「読むこと」の活動につなげる。「書くこと」の活動は、一人一人の記憶の手がかりとして、書き写して残す（ファイリング）などしておくといよい。「書くこと」は、アルファベットの文字読みや音読みをしっかりと指導をしてから行うべきである。授業者は、こうした「英語の４技能」に関する基本的な活動のつながりの意味を理解しておかなければならない。

- ・課題を見つけ、情報を集め、整理・分析し、成果を発信する「探究的な学習」
- ・「探究の課程（プロセス）」が授業づくりの鍵となる
- ・４技能（「聞く力」「話す力」「読む力」「書く力」）の活動を効果的に正しくつなぐ

（４）「振り返りシート」を活用した授業の振り返り

「振り返り」の時間は、一時間（本時）の授業を通じ、自分自身の成長や変容を客観的に見つけ直すための時間である。提示された「本時のめあて」にどれだけ近づけたか、達成できなかったことは何か（積み残した課題）、達成できなかった理由や原因は何か、などを発達段階レベル（学習の進捗状況等）に応じて点検する時間である。課題を明らかにする作業が、次の学習への意欲づけにつながる。また、「振り返り」の時間では、自分自身を振り返ることはもちろんであるが、周囲の友だちと「振り返り」を交流し、学級全体で共有しておくことも大切である。他人の考えや思いを客観的に知ること、「次は、こうしたい。こうなりたい。」という感情が芽生え、それが「学びに向かう力」へと結びついていく。このようにして「振り返り」に

よって、各単元における一時間一時間の授業が相互につながることで、より「深い学び」へと導かれる。

「振り返りシート」の活用については、それぞれの発達段階に合わせ、前述した内容をわかりやすく具体的に見直し、点検できるようにするための工夫が必要である。また、使用するシートは、1単元1シートで完結できるようにするとよい。そうすることで、各単元の終了段階において今回の単元を通じて学んだことや授業を通しての自己の変容や成長を確認することができる。また、特に高学年の英語科授業においては、評価に対してのより丁寧な説明責任が求められる。「振り返りシート」は、評価の客観的根拠としての証拠にもなる。さらに、「指導と評価の一体化」を図る上でも、「振り返りシート」を有効に活用することが、授業改善にもつながる。このような多角的な視点から「振り返り」の時間をより一層充実させるためには、「振り返りシート」の中身をしっかりと吟味し、整理されたものにしなければならない。

- ・「振り返り」で完結する授業づくり
- ・「振り返り」から指導プランを作成する逆算の授業づくり（「めたふ」から「ふため」へ）
- ・授業（本時）と授業（次時）をつなぐ「振り返り」

（５）積極的な classroom English の使用

英語が教科化となり４年が経過しようとしているが、学級担任が中心になって授業を行うという方向性が示された当初から、小学校の先生方にとって、自らの英語力に対する不安は大きいものがあつた。専科指導教員が導入・配置されているとはいえ、まだまだその不安は完全には払拭できていない。特に、本市においては、小学３、４年生の英語活動の授業でその傾向が強い。その結果、多くの英語活動の授業がALT主導で進められている実態がある。こうしたやり方は、決して間違ったやり方とは言えないが、TT（協働授業）の観点からすると、依存の度合いが大きくなりすぎないように注意する必要がある。TIとしての授業者(JTE)が、英語を使う機会が失われるようなことは避けたい。英語を教える授業者にとって、基礎的な英語力は必要な能力の一つではあるが、流暢な英語を使いこなす能力は、決して求められていない。むしろ、得意とは言えない英語を駆使し、ALTとコミュニケーションを図りながら、授業を進める姿こそ、児童のよきモデルとなる。英語がより身近に感じられ、英語への興味や関心を高めるものとなる。また、小学５、６年の授業では、Small Talkによる即興性のある英語を取り入れ、授業づくりに生かすことが大切である。身近な話題を取り上げ、二人の授業者(JTEとALT)が、ひとまとまりの内容のあるやり取りを行う。こうした取組を毎時間の授業の中に組み込んでいくことで、親しみのある時間や空間を演出でき、児童のコミュニケーションへの意欲を高めるものとなっていく。小学校最終年である６年生では、授業者は、４年間の系統的な英語授業を通じて、“Almost all English”の授業づくりを目指したいものである。

- ・授業者(JTE)は、最も身近なモデルである
- ・Small Talkは、コミュニケーションの潤滑油
- ・“Almost all English”の授業づくり

（６）ALTとの協働授業

協働授業(Team Teaching)は、複数の授業者が協力しながら一つの授業をつくりあげるものである。英語授業においては、JTEとALTの二人が授業づくりにおける役割分担を明確にしながら、阿吽の呼吸で授業を進める。それゆえ、絶妙のコンビネーションが求められる。こうした関係性を確立する上で、日常的なコミュニケーションは欠かすことができない。相互のコミュニケーション力が必要不可欠である。しかし、現状は打ち合わせ時間が十分に確保できないといったことが原因で、コミュニケーションが十分にとれず、授業づくりを行う上で障壁となっているところがある。ただ、こうした勤務条件に関わる課題は、あくまでも側面的な課題であり、それ以上に大きな課題は、教員一人一人の人と関わる力（＝コミュニケーション力）の

課題である。自身の英語力に、多少不安があっても「相手のことをもっと知りたい」「こどもたちのために、もっと楽しい授業にしたい」などといった授業者の思いが、目に見えない壁を壊す原動力となる。ALTと良好な人間関係を築くことで、授業は磨かれ、これまでにない輝きを放つ。豊富な経験を持つALTも多く、ことばが多少通じない所があったとしても、こちらの思いを十分にくみ取ってくれるはずである。アクティビティの引き出しやアイデアも豊富で、多様な手法で楽しい授業づくりを実現できる相棒（パートナー）である。頼るときは思い切って頼る、任せる時は全て任せるといったことも場合によっては必要である。お互いを尊重し合い、それぞれの良さを引き出し合いながら、協働授業の実践につなげてほしい。

- ・ことばの壁を壊し、コミュニケーション力を高めよう
- ・ALTは、授業づくりのよき相棒（パートナー）
- ・相手のことをもっと「知りたい」と思う気持ちが、コミュニケーションの原動力となる

（7）英語授業に対する不安について（現状に関する調査より）

小学校における英語の教科化が導入される2年前（平成30年）に本研究所が行った「外国語授業に関する調査」では、外国語の授業を行うことに対する不安感は、年代や経験年数に関係なく、概ね8割以上の教員が「不安がある」と回答していた。また、その不安感は以下の理由によるものであった。

【外国語授業に関する調査／平成30年実施】

- ・発音や語彙数が少ないなど、英語力に自信がない。
- ・外国語の授業をした（見た）ことがなく、一時間の授業の流れや展開の仕方がわからない。
- ・効果的なアクティビティを知らない。
- ・授業の準備が間に合わない。または、準備が負担である。（現状で手一杯である）
- ・支援が必要な子への（英語授業での）対応
- ・ALTと打合せをする時間がない。
- ・評価の仕方がわからない。

今年度12月に、再度上記の「不安感」について各校に調査を依頼し、現状を探った（次ページ表参照）。その結果、教科化になる以前に多くの先生方が抱いていた不安は、現在も完全に払拭されてはいないものの、かなり解消されつつある。各小学校とも、上記調査の「外国語の授業をした（見た）ことがなく、一時間の授業の流れや展開の仕方がわからない。」といった不安感については、ほぼ解消されている。これは、教科化の開始以降、多くの先生方が直接授業を担当し、その経験を積み重ねることによって、徐々に不安が解消したと考えられる。また、専科指導教員の配置やALTとの協働授業による成果なども、その大きな要因の一つである。半面、「効果的なアクティビティを知らない」という不安は、依然残されている。このことは、ALTの効果的活用に係る課題であり、「ALTとのコミュニケーションがうまく取れない」という不安に通じるものであると考えられる。ALTは、効果的なアクティビティについて多くの引き出しを持っている。そうした引き出しの中から、本時の授業における有効なアクティビティを見極め、取り入れることで授業が活性化し、児童の目の輝きも変わる。授業者（JTE）がすべてを抱え込まず、「足りないところは、（ALTに）補ってもらおう」、互いに補完し合い授業づくりを行うことこそが、真の「協働」授業である。そのためには、ALTとの日常的なコミュニケーション（意思疎通）は欠かさすことができない。また、「評価の仕方がわからない。」という不安感が複数の学校で見られた。「評価」は、授業づくりの上で最も重要なファクターである。「評価」への信頼を失うことは、学校におけるすべての教育活動、ひいては教育そのものの信頼を損ねることにつながる。教員一個人の課題としてとどめることなく、学校全体の課題という認識を持ち、具

体的な取組を行うこととすべての教職員が「評価」についての認識を共有しておくことが大切である。各校とも現状を点検し、実態をしっかりと把握するとともに早急な取組が必要である。授業準備やALTとの打ち合わせ等、勤務内容や条件に起因する不安は、各先生方の創意工夫やALTの効果的な活用をはじめ、各学校での支援体制づくりや学校ぐるみの主体的・組織的な取組により解消されつつあるところもある。ただ、ALTの勤務条件等の契約上の課題については、引き続き改善を図る必要がある。最後に、自身の「英語力」についての不安の解消は、(6)で述べたことと合わせ、先生方一人一人の持続的な自己研鑽と体系的な研修システムの充実を図ることで完全解消につながることを期待する。玉津小学校では、ここ数年にわたり、「外国語（英語）」を校内研究のテーマとして、組織的な取組が実践されてきた。英語の授業研究を通じて、持続的に授業改善や個々の指導力向上が図られている。その結果、一人一人が自信を持って英語の授業に臨んでいる姿をうかがうことができる。このように学校全体が共通の課題解決に向け、みんなで一緒に取り組むことにより不安が和らげられ、一人一人の自信の芽生えにつながっている。このことが、「英語力」への不安を解消する鍵となっていることを紹介しておく。

【外国語授業に関する調査／令和5年12月実施】

質 問 項 目	守山小	物部小	吉身小	立入小	小津小	玉津小	河西小	速野小	中洲小
自分の英語力に自信がない	○ 1	○ 1	○ 3	○ 1	○ 1		○ 1	○ 1	○ 3
授業の流れや展開の仕方がわからない		○							
効果的なアクティビティを知らない	○	○	○ 1		○		○ 2	○ 2	○ 1
評価の仕方がわからない	○ 2	○		○	○ 2	○ 1	○ 3		○ 2
授業準備が大変である		○ 3	○ 2	○ 2	○	○ 1			
ALTとのコミュニケーションがうまく取れない	○ 3	○ 2		○ 3	○ 3			○ 3	
その他									

※評価方法：英語授業を行う教員のうち、おおよそ半数以上の教員が不安を感じているものをすべて選択し、そのうち割合の高いもの3つを選び順位付けをする。

3 おわりに

教科担任制の拡充、デジタル教科書の導入・普及、ICTの活用（タブレット端末）など教育改革の根幹である授業改革が進行している。また一方で、教育環境を整えるための教職員の働き方改革も取組が進められている。今後も引き続き、教育分野における改革が一段と進み、状況が刻一刻と様変わりしていくであろう。教育の質を維持し、向上させるためには必要不可欠な改革である。ただ、その変化のスピードに学校現場が追いついていないといった現状もみられる。新しいツールやシステムが導入されても、使いこなさなければ意味がなく、宝の持ち腐れとなれば、結果として授業改善に結びつかなくなる。ひいては、教育の質的低下を招く。教育に携わる者は、常に変化に敏感で、状況に応じて自分自身を変えることをためらってはいけない。「現状維持」をよしとすることなく、常に変わる勇気を持ち、変える努力を行う者にこそ、「未来へつながる守山の教育」を創り出すことができる。

最後に、使い慣れた小学校英語の教科書が4月から変わる。決して小さな変化とは言えない。現場での英語指導に携わっていただく先生方には、その「変化」に対応するための準備が迫られる。新たな年度の始まりを迎える時期ではあるが、準備万端整え、守山市のこどもたちが楽しく英語を学べるよう、引き続きご尽力いただくことをお願いする。

Don' t be afraid of change! We will go to the Next Chapter.

～中学校全国学力学習状況調査結果から読み解く小学校英語教育における課題～

コロナ禍に突入する以前の平成31年度（令和元年度）に、中学校での全国学力学習状況調査（以下、「学学テスト」という）において、初めて「英語」が実施された。結果は、平均正答率（％）が、守山市 56、滋賀県 55、全国 56 で県や全国と比較してほぼ同水準で、顕著な差は見られなかった。ただ、特徴的な課題として、いくつかの問題で無解答率が高かった。具体的には、「来日する留学生の音声メッセージを聞いて、部活動についてのアドバイスを書く」や「食糧問題について書かれた資料を読んで、その問題に対する自分の考えを書く」といった「聞いて（アドバイスを）書く」「読んで（自分の考えを）書く」などの記述式設問に対する課題がみられた。その後、コロナ禍による「学学テスト」の中止もあったが、今年度4月に2回目となる「英語」の「学学テスト」が実施された。結果は、守山市 51、滋賀県 46、全国 45.6 となり、県や全国の平均を5ポイント程度上回った。今回のテストが前回と異なるのは、小学校で英語が教科化となった初めての小学6年生が、中学3年生となり実施されたテストであったということである。守山市においては、教科化が実施される数年前から、それに向けた研究や研修の充実が図られ、実際に英語の授業を行う学級担任等の不安の払拭や指導力の向上が進められてきた。合わせて、専科指導教員やALTの配置も重点的に行われてきた。教科化の初年度となった令和2年度においては、物部小学校の6年生（4クラス）を除き、他の市内8小学校の6年生では、専科指導教員が授業を受け持つ体制が整えられていた（小津小学校2クラスは、社会人活用）。小学校におけるこうした授業体制の整備や英語授業の充実が、今回の中学校における「学学テスト」の結果にどのようにつながったか、現段階における客観的な分析はできていないが、今後引き続き実施される中学校での「学学テスト」の結果を注視していく必要がある。また、今回のテストでは、無解答率は全体的に低下したが、前回と同様に「ロボットについて書かれた英文を読み、書き手の意見に対する自分の考えとその理由を書く」「メールの英文を依頼する表現に書き換える」「学校生活（行事や部活動など）の中から紹介したものを一つ取り上げ、それを説明するまとまりのある文章を書く」など、依然記述式設問における無解答率の高さが目立った。こうした課題を単に中学校での授業づくりの課題としてとどめることなく、小学校における英語の授業づくりにつなぐことが大切である。普段の授業づくりでのコミュニケーション活動等において、自分の考えや思いをしっかりと持たせ、それを友だちや身近な人たちに自分のことば（英語での表現）で伝えさせるトレーニング等を効果的に仕組んでいくことなど、授業の活動づくりにおける工夫が必要である。また、授業を介した小・中学校間における相互連携のあり方をあらためて再認識、再確認することも重要である。小・中学校で英語授業に携わるすべての教員が、中学校区をベースにそれぞれの学校で実践されている英語授業の現状を把握し、そこから見えてくる課題を相互に共有し、授業改善につなげることが大切である。以前から、こうした小中連携は、市教育研究会英語部会等の組織を中心に行われてきたが、コロナ禍における交流の制限等の影響もあり、やや停滞感がみられるのではないだろうか。多くの課題が山積しているが、小中相互の授業実態をより効率的に把握するために、デジタル技術等を駆使した新たな連携のスタイルを探るなど、早急に取り組むことが大切である。また、このことは、単に英語の授業に留まる課題ではなく、すべての教科の授業づくりにつながっている。教職員一人一人が、しっかりとこうした認識を共有し、市全体、学校全体で組織的に取り組んでいかなければならない。

Nothing ventured, nothing gained.